

# ブランウェル・ブロンテにおける火の表象

服 部 慶 子

はじめに

パトリック・ブランウェル・ブロンテ (1817~1848) は、高名なブロンテ三姉妹 (シャーロット、エミリ、アン) の栄光の陰に隠れて批評界では注目される機会に恵まれていないが、彼は幼少の頃より詩の才能を発揮し、肖像画家としての才能も持っていた。本論ではブランウェルの詩作品における「火」にまつわる表現に着目し、その表象について考察を行う。

ブランウェルの詩は出版されたものがごく少なく、彼が書き留めたノートが散逸したり、エミリやシャーロットのものとして残っているものがあり、カノンが確立していないが、本稿ではヴィクター・ノイフェルトが編纂した三巻本 *The Works of Patrick Branwell Brontë* を参照する。引用文は詩の行の冒頭が小文字で始まる等、不備だと思われるような箇所が見られるが、原文どおりである。また引用文中の下線は筆者によるものである。

彼の詩には死に対するオブセッションが濃厚に漂っており、それとともにすべての命を飲み込むような海の描写が作品の至るところにあふれている。「死」と結びつく「海」のイメージについては 2014 年の日本ブロンテ協会・関西支部春季大会のシンポジウムにおいて瀧川宏樹氏が考察を行っているが、彼の作品を特徴づける「死」と「海」のイメージを前景とすれば、その波間に翻弄されながら微かに灯る「火」のイメージが点在する。実は、ブランウェルの作品には比喩表現を含めて「火」に関する描写も豊富に存在するのだ。海とは正反対の性質でありながら、生命と破壊、すなわち生と死の両方の表象である「火」に着目してブランウェルの詩作品を検証していきたいと考える。

## I Genii が表象するもの

「火」について考察する前に、ブランウェルの詩において「火」と強く結びついていると考えられる Genii (単数形は Genius) にまず着眼したい。この超自然的な存在 Genii に訳語をあてるのが難しく、辞書では「悪魔」とか「魔神」を充てている場合もあるが、必ずしも悪いものというわけではなく、「守護霊」を意味することもある。ブロンテ家の子供たちが物語を作るにあたって念頭にあったと言われている『アラビアンナイト物語』のなかの、例えば「アラジンと魔法のランプ」に出てくる精霊は Genii と英訳されており、*O.E.D.* では次のように定義されてい

(70)

る。

### Genie

1.1 †a.1. a tutelary spirit. (=genius 1.) Obs.b.1.b A jinnee; one of the sprites or goblins of Arabian demonology. [The word genie was adopted by the Fr.translators of the Arabian Nights as the rendering of the Arab. Word which it resembled in sound and in sense. In Eng. Genie has been commonly used in the sing. And genii (see genius 2) in the plural.] (O.E.D.)

つまり「アラビアの悪魔学における鬼や妖精の一種で、アラビア語を翻訳するにあたって音と意味をくんで *genie* という言葉が使われた」とあり、「英語では単数形で使うことが多いが複数形は *genii* である」と記述されている。さらに *genii* の単数形 *genius* の定義を見てみると、次の引用で定義されているように守護神を意味している。

### Genius

1-1 With reference to classical pagan belief: the tutelary god or attendant spirit allotted to every person at his birth, to govern his fortunes and determine his character, and finally to conduct him out of the world: also, the tutelary and controlling spirit similarly connected with a place, an institution, etc. (O.E.D.)

「古代の異教の信仰に関連して、守護神もしくは背後霊のようなもので、人が生まれたときからついてまわり、その人の運命や性格を決定し、最後にはこの世を去るときに導いてくれるもの。また土地や建物に似たようなかたちで結びついている守護霊もしくは支配霊」であると定義されている。

実際、ブランウェルも *Genius* を邪悪で恐ろしい存在として描いている場合が多いが、例えば彼がわずか12歳のときに編集した自家製版「ブラックマガジン」(1829年)に掲載されている“Nights”のSene 2には次のような描写がある。

if you live on the top of a mountain

or if you wear a crown

—The Genii meddle with you

Think not that in your graves

you will be quiet there—

For Genii come with spades

To dig you up they dare

Genii will meddle with you

even if in your palaces—

among your courtier[s] there

The genii meddle with you—

For mischief is there care—

Genii must meddle with you.

あなたが山の頂上に住んでいても

王冠をかぶっていても、

—Genii はからかってくる

あなたが墓のなかにいても

静かでいられると思っではいけない—

というのも Genii は鋤をもってやってきて

果敢にも墓を掘り返す

Genii はあなたにちょっかいを出すだろう

あなたがたとえ宮殿で—

家来に囲まれていても

Genii がちょっかいを出す—

というのも彼らはいたずらが大好きだから—

Genii はあなたにちょっかいを出すにちがいない

(“Nights”, SCENE 2, 6-18)

ここでは Genii は必ずしも恐ろしいだけの存在ではなく、mischief という言葉にむしろユーモラスを感じさせる。また一方、後で言及する“Revenge” (1831) という詩劇においては主人公の息子が Genii のおかげで命拾いをする場面があるので、Genii は命を守ってくれる守護神的な存在でもあるのだ。そのようなことから私は Genii を二面性をもった精霊のような存在だと考えるが、本稿では原語のまま Genius または Genii と表記する。

ブランウェル編集の「ブラックマガジン」(1829年)に最初に登場するのが“Dirge of the Genii”という題名の詩だが、“THUS I begin my song” (「このようにして私の歌を始める」)とブランウェルは歌い始めたその直後に、“Genii are all gone”と続け、Genii が永久に去ってしまったというのだ。彼らが去ってしまったことをひとしきり嘆きつつ、この詩を終えている。ところが、Genii は永久になくなったと思いきや、その後に書かれた詩において Genii (もしくは単数形の Genius) は何度も続けて登場している。また“Dirge of the Genii”においては、Genii の具体的な特性は描かれていないが、ブランウェルが書いたもののなかで、「ブラックマガジン」以前のもののなかで、Genius の前身を表すようなモンスターが登場している。

ジュリエット・パーカーの『ブロンテ家の人々』によると 1826年6月、すなわちブランウェルが7歳のときに彼の父がリーズでおもちゃの兵隊を買ってきたので、ブランウェルとその姉妹たちはそれぞれがさっそく兵隊に名を付けて物語を作り始めた。その物語はブランウェルによって記録され、“History of Young Men”と名付けられた。そのなかで、冒険を続ける勇敢なイングリッド人がアフリカの海岸にある王国に上陸して内部を探検しているときにモンスターに捕ま

(72)

ったと書かれており、その描写は以下のとおりである。

an Immense and terrible monster his head touched the clouds was encircled with a red and fiery Halo his nostrils flashed forth flames and (smo) smoke and he was enveloped in dim misty and indefinable robe. (Barker 154)

「頭が雲に届く巨大で恐ろしいモンスターは赤くて火のような後光に包まれ、その鼻孔からは炎と煙を吐き、その姿はおぼろげで霧のような漠然とした衣をまとっていた」とあり、そのモンスターは赤毛でナイトガウンを纏った自分自身だとブランウェルは脚注で説明している。

このようにブランウェルが最初に描いたモンスターが赤い火に包まれ、炎を吐いていたということは大変興味深く感じられる。というのは、ブランウェルの詩の中で **Genii** は必ずといってよいほど火や稲妻とともに登場するからである。であるから **Genii** はさきほど言及した炎に包まれたモンスターと明らかに重なっているのだ。そしてブランウェルが **Genii** の前身的存在である「火を吐くモンスター」と自分を同一視していることには大きな意味があると考えられる。また、『アラビアンナイト』を意識しながらおもちゃの兵隊できょうだいたちが物語を作っていくなかで、シャーロット、ブランウェル、エミリ、アンはそれぞれタリイ、ブラニイ、エミイ、アニイという名前の **Genius** として自身を登場させていることにも触れておきたい。

ブランウェルはひとしきり作品の中で **Genius** や **Genii** を登場させた後で、1833年の“SONG applicable to the present crisis By Young Soult the Ryhmer”を最後に **Genii** は姿をひそめ、最後にひょっこり登場するのは、1841年の“Amid the worlds wide din around/I hear from far a solemn sound”で始まる作品の60行目から67行目にかけて、以下のように描写されている。

I often times would think that she [the moon]  
Was some bold vessel oer a sea  
Mid unknown regions gliding  
Perhaps with Parry in the north  
On stra[n]ge discovery venturing forth  
On stormy waters riding  
Perhaps with Sindbad mid those Isles  
Where **Genii** haunt and sunshine smiles.

私はしばしば思う。彼女 [月] が  
海を渡る大胆な船だったらいいのにと  
未知の地域をすべるように進み  
たぶんパリーと一緒に北方で

不思議な発見に勇敢に乗り出し  
 嵐の海を進んでいく  
 たぶんシンドバッドと一緒にそれらの島々の間を  
 そこにはジニーが住み着き太陽の光がほほえんでいる。

このように想像のなかで船に見立てられた月が海をかけめぐり、Genii の住む島を訪れる場面が描かれている。Genius や Genii という言葉が作品中で直接使われなくてもその存在はブランウェルの意識の根底にずっと流れていたと考えられる。

ベンジャミン・フランクリンによって雷には電気が関係していることが発見されたのはブランウェルが誕生するしばらく前のことだが、雷がしばしば火災を引き起こすことから、ブランウェルの詩のなかで、ほほいつも雷とともにある Genii は火を強く連想させる。実際 “THE PROPHECY” (1829) という詩のなかで、ブランウェルは、“I saw a flame—This means a flash of Lightning” (ほくは炎を見た—これは稲妻の閃光のことだ) と言及しているのでブランウェルにとって雷、稲妻は火を伴うものであったと考えてよいと思われる。

Genii が描かれている作品に注目すると、ブランウェルが編集した「ブラックマガジン」の第二号に掲載されている “If you live by the sunny Fountain” (1829) で始まる歌で、いたずら好きな Genii は再登場する。

One day I went out a walking  
 And I saw a sheet of fire  
 Hovering oere the mountain  
Kindled was my are

It blazed upon the mountain  
 And upon the castle wall—  
 It blazed upon the Ocean—  
 …

I saw it was a Genius now  
 ある日ほくは散歩に出て  
 炎の広がりが  
 山の上を漂っているのを見た  
 私の眼に火がともされた

それは山の上や  
 城の壁や

(74)

海の上で煌いた

．．．

ほくはそれが **Genius** だとわかった

私はこの歌が、ブランウェルにおける「火」のイメージについて論じる際に重要だと考える。というのは、ここではっきり **Genius** は山や海の上で燃える炎だとして描写されているからである。そしてその炎はほく（＝ブランウェル）の眼に点火すると書かれていることからブランウェルの想像力に火を灯し、エネルギーを与えてくれる存在でもあると考えられるのだ。

続いて“**THE SONG OF THE ANCIENT BRITON'S ON LEAVING THE GENILAND by UT**”（1829）（**UT** は **us two** の略で、シャーロットとの合作だという印である）においては、**Genii** は次のように描かれており、雷の広間に住んでいる。

those tyrant's of the air  
who dwell in halls of thunder  
& robes of lightning wear

それらの空の暴君は

雷の広間に住み

そして稲妻の衣をまとっている

（“**THE SONG OF THE ANCIENT BRITON'S ON LEAVING THE GENILAND by U T**”, 18  
-20）

また“**ON seeing the Garden of A Genius by U T**”（1829）では、**Genii** の住む庭園の楽しい様子が描かれている。

How pleasant is the world  
where mighty **Genii** dwell  
like a visions is the beauty  
of wild forest stream & fell

．．．

they may robe themselves in darkness

themselves with lightning crown

強大な **Genii** の住む世界は

なんて楽しいのだろう

未開の森の小川や丘陵の

美しさは幻想のようだ

．．．

彼らは暗闇のなかで衣をまとう  
そして雷の冠をいただいている

(“ON seeing the Garden of A Genius by U T”, 1-4 & 29-30)

そしてこの詩の 38 行目には “while thunder rolls around” とあり、雷の冠をかぶった Genii の周りには雷がとどろいているのである。

“Visit to the ruins—ColdaiDuh” (1829) では恐ろしい音とともに登場する Genius は自らの眼から稲妻を発する。

and soon there was a Dreadful sound  
of trumpets and a heideus form

Appeared striding upon a cloud  
red lightning flashing from his eye

そしてまもなくラッパの恐ろしい音がして  
恐ろしい姿が顕れ

雲の上を大股で歩き  
その眼から赤い稲妻を放っていた

(“Visit to the ruins—ColdaiDuh”, 30-33)

Genius に追い払われた「ぼく」は逃げ去り、いばった Genius が恐ろしい稲妻を落とす前に遠ざかった (“away I went/and was far from this Genius proud/Ere he his dreadful lightning sent”, 39-40) と言ってこの詩を終わっている。“Ode to the chief Genius BANY” (1829) という詩では “O thou mighty Genius Thou Ruler of the world” (世界の支配者である強大な Genius よ) と Bany という名の Genius を讃えているが、Bany も雷の雲の上に乗っている。続いて “THE PROPHECY” (1929) では Genius は次のように描かれている。

I saw a flame which shot along the sky  
And then I heard a peal of thunder loud  
The rain came down in torrent I did fly  
for there did stand a genius on a cloud

In his right hand he held a flaming sword  
ぼくは空をよぎる炎を見た

(76)

それから大きく鳴り響く雷鳴を聞いた  
滝のように雨が降り、ぼくは逃げた  
なぜなら **Genius** が雲の上に立っていたからだ

彼は右手に炎の剣をもっていた

(“THE PROPHECY—By young Soult TR”, 1-4)

さらに “Adress to the Genius &c” (1829) においては、**Genius** は前向きに突進し、人間どもを怖がらせるのだが、やはり降り注ぐ稲妻を伴い、「破壊」を名とし、名声や戦争の仲間でもある。

Onward thou rushest in glory and might  
Onward thou rushest all men to affright  
Onward thou rushest black clouds are lowering  
Onward thou rushest lightning is pouring

...

Onward thou rushest Destruction thy name  
Onward thou rushest companion of fame  
Onward thou rushest ally of war

なんじは栄光と力をまとめて前に向かって突進する  
なんじは前に向かって突進してすべての人間を怖がらせた  
なんじは前に向かって突進し 黒い雲は下がってくる  
なんじは前に向かって突進し 稲妻が降り注いでいる

なんじは前に向かって突進し なんじの名前は破壊である  
なんじは前に向かって突進し 名声の仲間である  
なんじは前に向かって突進し 戦の支持者である

(“Adress to the Genius &c”, 1-4 & 17-18)

続く “Song 1” (1829) では、嵐にのって空をすばやくすべる **Genius** は自分の恐ろしい姿が自慢で、雲の上を大股で歩く。

W[h]ose that who ridest on the storm  
Swiftly oer the sky he glides  
it is a genius hideous form



but in his hieousness he prides

See now he strides upon a cloud

嵐の上に乗っていくものは誰でも

空の上をすばやく滑っていく

それは恐ろしい姿をした genius だ

しかし彼は自分の恐ろしさを自慢にしている

見よ 今彼は雲の上を大股で歩いている

(“Song 1”, 1-5)

Genius は国民に迫りくる悲惨な戦いの予言をし、自分は位の高い Genius (“I am a genius high”, 20) だと言い終わってから飛び去っていく。

また “Address to the Genius of War” (1929) というタイトルの詩は、詩行のなかには Genius は登場しないが「とどろけ、とどろけ雷よ。そして稲妻よ飛べ」(“Roll Roll o ye Thunders/And you ye Lightnings fly”, 1-2) と雷を呼び起こすところから始まり、次の引用のように同じ呼びかけの言葉で終わっており、雷と Genius の結びつきは明らかである。

Roll Roll o ye Thunders

And you ye lightnings fly

Rush on Rush on ye torrents

And Deluge the sky

とどろけ とどろけ おお なんじら雷よ

そして なんじたち稲妻は飛ぶ

突進せよ 突進し続けよ なんじたち どしゃ降りの雨よ

そして空を水浸しにせよ

(“Address to the Genius of War”, 17-20)

“Lines by one who was tired of dullness upon the same occasion” (1829) (UT) では Geni が踊りながら雷を射る姿が描かれている。

in your splendid cloud halls

princely Geni dance

till from the vapour walls

bloody lightnings glance

(78)

your music is black thunder

おまえのすばらしい雲の大広間で

王者のような Geni が踊る

そして蒸気の壁から

血のように赤い稲妻が射る

おまえの音楽は黒い雷だ

(“Lines by one who was tired of dullness upon the same occasion”, 21-25)

同年の1829年に書かれた劇詩“Laussane : A Tragedy”では Genii という言葉は登場しないが、稲妻が多用されており、このようにわずか一年の間、しかも12歳という若さで Genii を主題とした詩を10個、言い換えればその年のほぼ全作品が Genii と稲妻を扱っていることから、ブランウェルにとって Genii が強烈な存在であったことは間違いなく、「火」について語る際に Genii と雷についても言及することが重要だと考えられる。(1830年の劇詩“Caractacus”では Genius には言及されていないが、やはり稲妻という言葉が頻繁に使用されている。)

先に言及した劇詩“Revenge” (1831年)では、王子ジョンに息子を殺されたと思って復讐を誓うアルバートだが、実は息子は雷雲にのった Genius が引き起こした嵐のおかげで命拾いをしていた。天から赤い閃光が煌き、大波が寄せて息子を処刑しようとしていた者たちを死なせてしまったのだ。そのときの Genius の姿は以下のものである。

While the dread Genius of the gloomy tempest

Rode on a thunder cloud and from his urn

Poured down his blasts his Fires . . .

その間に陰鬱な嵐の恐ろしい Genius が

雷雲に乗り 彼の壺から

突風と火を注いだ

(“THE REVENGE”, ACT1, SCENE II, 65-67)

ここでは Genius はアルバートの息子の命の恩人で、守護神の役割を果たしている。

“O Mars who shakest thy fiery hair” と軍神である火星マースに向かって呼びかける1831年の詩では、炎の髪の毛を揺らすマースへの呼びかけから始まり、戦の王者で嵐の Genius でもあるマースは赤く明るく煌いている (“Thou shinest flickering red and bright/The Genius of the storm”, 12-13) と描写されている。続いて“ODE IN PRAISE OF The Twelves Sung at the Olympian games” (1831)においては、Genii は嵐の空のなか我々の頭上高くに炎の剣を

ふりかざす (“from the stormy sky/Oer us extend their flaming swords on high”, 3-4) と描かれているし、翌年 1832 年の “ODE on the Celebration of the Great AFRICAN GAMES” では、強大な Genii が国民の歌声にこだまを返す (“While mighty Genii with an answering voice/Re echo back the song”, 20-21) と歌われているが、この詩では “Genii’s sea” とあり、海も Genius の支配下にあり、丘にも Genii が王座についていると歌われている。また戦争の危機を歌った 1833 年の “SONG applicable to the present crisis” では、「戦争の血なまぐさい雲」 (“a bloody cloud of war”, 2) は稲妻のエネルギーを蓄えてやってきて (“It comes full charged with thunder”, 13)、その周りを赤い Genii が飛びまわると書かれている。そしてブランウェルは Genii の存在を見過ごして日々を送ってきたわれわれに警告を発する。

さきほど言及したように、この詩を最後に 1841 年まで Genius や Genii は作品からいったん姿を消すが、これだけの数の初期作品に Genii を登場させていることは注目に値する。恐ろしく稲妻と炎を伴った戦いの精霊 Genii はブランウェル自身でもあり、ブランウェルの創作欲をかきたてる守護神であったと同時に有名になりたい彼の野心を象徴しているように思われる。

## II 比喩としての火

ブランウェルの詩において「火」は戦闘場面の描写で多く使われ、怒りや復讐心、闘志を掻き立てる起爆剤、時には希望の灯として比喩的に使われている。例えば 1829 年の “Dramatic Poem” では、リリヤード伯爵に奪われ、追い出された領土を取り返すべく復讐を決意するローザンヌ伯爵は、次のように語り、リリヤード伯の城を炎で包もうと言うのだ。

... I will rise & go  
 Will fling the Firebrand of avenging war  
 Upon the Monsters head! Oil on my soul  
is poured to kindle up the <sa[cl]red> flame  
 Wich soon shall rise ; upon his haughty towers  
 The Beacon blaze ; of my returning Fame!  
 ... 私は立ち上がって行こう  
 復讐の戦の松明を投げつけよう  
 怪物 [リリヤード伯] の頭に！私の魂の油が  
 注がれて聖なる炎が点火されて  
 すぐに燃え上がり、そびえたつ塔の上で  
 狼煙が燃えて私の名声が蘇る

(“A DRAMATIC POEM BY YOUNG SOULT”, ACT FIRST, Scene 1<sup>st</sup>, 9-14)

(80)

それに対してリリヤード伯は次のような激しい言葉を吐く。

As Heritic he shall be branded and  
Fire round him like a snake shall coil  
Till all his bones do hiss his muscles crack  
And down he falls a worthless blackned coal  
異端者のように彼 [ローザンヌ] に烙印を押し  
蛇がトグロを巻くように彼を炎で包み  
すべての骨が音を立てて筋肉が裂け  
値打ちのない黒焦げの炭になるまで焼いて倒してやる

(“A DRAMATIC POEM BY YOUNG SOULT”, ACT TWO, SCENE THE SECOND, 24-7)

“The Fate of Regina” (1832年)では、反逆者に攻め込まれて陥落寸前のレジアイナには焔と煙が至る所にたちこめているが、降伏しないしぶといレジアイナの王たちに対して、次のような詩句が挿入されている。

But Mars no more will brook this long delay  
He bids the fates to clear the doubtful day :  
They with new force the rebels hearts inspire  
And with the hope of conquest sets their souls on fire.

しかしマースはこれ以上この長い遅れを許そうとしない  
彼は運命の女神にその決着がつかない日に片をつけるよう命じる  
女神たちは反逆者たちの心を新たな力で鼓舞し  
征服の希望をもたせて彼らの魂に火をつける

(“The Fate of Regina”, Book 1st, 93-96)

また時には灯りは希望の象徴でもあり、1830年の劇詩“Caractacus”では、ローマ人に領土を追われたカラクタクスは、以下のように語る。

O HOPE I cast my lingering eyes upon thee  
Thou art my Lamp whose bright but glimmering rays  
Do light me on my way

おお希望よ 私はそなたの上に自分のぐずぐずした眼をなげかける  
そなたは私の灯火だ その明るくて微かに光る光線で  
私の道を照らしてくれる

(“Caractacus” ACT, THE SECOND SCENE FIRST, 30-2)

ところが、雷や火に爆発的なエネルギーを与えてもらっていたブランウェルの詩の勢いに翳りが出てくる。彼は1834年あたりからアンゲリア物語を書き始めているのだが、ブランウェルのペンネームの一つで、アンゲリア物語の中心人物パーシーの別名でもあるノーサンガーランドが書いたとされる“Backward I look upon my life”で始まる1834年の詩では「自分は死んで冷たくなっていることがわかっている、自分の運命は真っ暗で自分の精神は老いている」(“I know that I am dead and cold. My fortunes black my spirit old”, 19-20)と歌っている。その詩の冒頭は以下のようなものである。

Backward I look upon my life.  
 And see one waste of storm and strife  
 One wrack of sorrows hopes and pain.  
 Vanishing too arise again.  
 That life has passed through evening where  
 Continual shadows veild my sphere  
 わたしは自分の人生を振り返る  
 そして嵐と闘争で荒れた土地と  
 悲しみと希望と苦痛の断片が見える  
 それらは消えながらまたわき起こってくる  
 人生は夕方を通り過ぎ そこでは  
 絶え間ない影がわたしの領域を覆う

(1-6)

そして振り返ってみると、誇りと憎しみ、雷と野心、稲妻だけが鉄の心を引き裂くことができたのだと続けている。17歳にして自分の人生は影に覆われていたと絶望するブランウェルはまるで自分の命がそう長くないことを予感していたかのようなのである。同じ1834年に書かれた“Thermopylae”では、ギリシャの美しい風景を想像して描いた後に、「見たところ心配から解放されているかのような額は心の絶望と内面で燃えあがる戦いを隠そうと努力している(“A forehead seeming smoothed from care/Striven to conceal a hearts despair/And inward burning strife”, 33-35)という二行が挿入されており、戦争直前のギリシャの緊張感を描いているのだが、この二行はブランウェルの心の絶望感と葛藤を写し取っているかのようなのである。しかし、1836年の長編詩“Misery”においては、ノーサンガーランドの声を借りて、ブランウェルは以下のように豪語している

—Ha! well indeed I know  
 The very fire that burns me now,  
 The energy of my soul  
 はっ！ わたしは実によく知っている  
 わたしを今燃え上がらせる炎そのものを  
 魂のエネルギーを

(“Misery” Part 1, 128-130)

燃え上がる炎がブランウェルの魂に活力を与えてくれるかのようだ。そして自分が願ったゴールにたどり着いたとき、そこでは「情熱の稲光が炸裂し戦いの雷が轟く」(“Where passions lightnings burst and Battles thunders roll”, 137) と語る。

一方、“Still and bright in twilight shining” で始まる 1836 年のもう一つの長編詩では、ブランウェルはアングリア物語の中心人物で、ノーサンガーランドでもあるパーシーに向かって「汝の道は血と炎をくぐって進むだろう」(“Thy path shall pass through blood and flame”, 302) と呼びかけ「彼 [パーシー] の決して滅びることのない名前が未来の世界を炎で包むだろう」(“Tis He whose never dying name/Shall set a future world on flame”, 332-3) と予言している。パーシーの娘、メアリが話者であると推定される、1837 年の “Well I will lift up my eyes once more” で始まる作品の 166 行目から 7 行目にかけて、死の床にあって「感覚や魂、記憶が失われても感情は尚背後で燃えている」(“Twas sense and soul and memory lost/ Though feeling burned behind”, 166-7) と語られている。1834 年に書いたものを書き直した 1837 年の “The Rover” では、ノーサーガンランドは、「さあマッチをつけろ」(“Now Light Your Matches!”), 31) と命令し、「われわれの眼は火のような光を発する」(“our eyes glance fiery light”, 49) と歌い、戦闘気分を高揚させている。1836 年の “Percy’s Musings” では、ザモーナの眼を「内なる炎でかくも輝くあの眼」(“that eye with inward fires so bright”, 31) と表現している。1837 年の “Song by Percy” においては、パーシーの言葉は「燃える心から発せられた」(“Those words breathed from a burning mind”, 60) とあり、以下のように続く。

Yes—Percy saw and Percys soul  
 Felt all the flame he wished to inspire  
 Till doubly spurning all control  
 He plunged in that destroying fire  
 And gave his fiery Heart the rein  
 そうだ—パーシーは見た　そしてパーシーの魂は  
 自分が鼓舞したいと願う炎のすべてを感じ、  
 すべての支配を二重にはねのけて

あの破壊的な炎の中に身を投じ  
火のように燃える自分の心に手綱をゆだねた

(“SONG BY PERCY”, 524-528)

戦闘場面には火の描写がつきものだが、戦闘意欲を表すのにも火や炎が比喩的に使われており、それはブランウェルの創作意欲を表象しているとも考えられる。1842年（1841年のラデンデンフットノートに記載）の“LORD NELSON”では、戦の最中の船上にいるネルソンの姿が次のように描写されている。

While like a burning brand his spirits flame

Brightened as it consumed its mortal frame

He heard Death tapping at his cabin door

He knew his lightning course must soon be oer

その間燃え上がる燃え木のように彼の精神の炎は

死すべき肉体を消耗しながら輝いた

彼は死神が枯れの船室のドアをたたく音を聞いた

彼は自分の稲妻のような人生がまもなく終わることを知っていた

(“LORD NELSON”, 81-84)

ブランウェルが崇拝するネルソン卿の人生そのものが稲妻のような激しいものであり、ネルソンは来たるべき死を見据えながらその精神を燃え上がらせていたという。

1843年の“THORP GREEN”では、「近づいてくる死が命のかすかな残り火を消すとき汝[記憶]に感謝するだろう」(“Ill thank the[e] when approaching death/Would quench lives feeble ember, 17-18)と歌っており、ブランウェルの魂の炎は弱まっているかのように思われる。しかしながら、ハリファックス・ガーディアンに掲載された1846年の“SPEAK KINDLY”では、ブランウェルは自身を“thy fellow man”と客体化し、悲しみに沈んでいる彼に優しく話しかけてやってほしいと読者に呼びかけて、次のように語りかける。

Oh, chide him not—nor coldly spurn

His now repentant tears ;

For from that one good spark may burn

A flame in after years!

ああ、彼を叱ってはいけないし

今は悔い改めている彼の涙を冷たく撥ねのけてもいけない

というのは後になってあの一つの善良な火花から

炎が燃え上がるかもしれないからだ

(“SPEAK KINDLY”, 21-24)

絶望のなかにも微かに火花が残っており、それはまた再点火するかもしれないという希望をブランウェルは持っているようである。

そしてブランウェル死去の一年前の1847年には“**He said “I scarce know why we have Our few years freedom from the grave”**（「なぜ墓に行く前に数年間の自由があるのかわからない」と彼は言った）で始まる無題の詩で、パーシーに「そして今、時がやってきて消えていた炎が再び燃え上がる」（“**And now again that hour arises /The extinguished fires burst up again, 21-22**）と語らせており、死が近いことを予感しながらも短い時間のなかで再度命の炎を精一杯燃え上がらせようとする意欲が感じられる。

このようにブランウェルにとって「火」とはすべてを焼き尽くす破壊の象徴であると同時に魂を点火し、その火の力が想像力の発露となるエネルギーの源だったと考えられる。晩年になって火に関する表現は激減するものの、彼の創作意欲と野心を象徴する炎を最後まで燃えさせたようにしていたようである。

\*本稿は中央大学多摩キャンパスで開催された日本ブロンテ協会2017年大会におけるシンポジウム「ブランウェルの人と芸術」で発表した「ブランウェルの微かな命の灯」に加筆、修正を行ったものである。

#### 引用文献

Barker, Juliet, *The Brontës* (London: Weidenfeld and Nicolson, 1994)

Neufeldt, Victor A., ed. *The Works of Patrick Branwell Brontë* 3 vols. (New York and London: Garland Publishing, 1997-99)